

# 「てんしば」における空間構造と利用行動からみた公園デザインに関する研究

現代システム科学域・環境システム学類・環境共生科学課程

山本 真里奈（下村・阿久井ゼミ）

**1.研究目的** 近年、欧米諸国はもとより、わが国においても、人々の利用行動に主眼を置き、公園や街路などの公共空間を再生する気運が高まっている。本研究では、わが国における Park-PFI 制度の適用を通じて整備された、「てんしば」を調査対象地とし、空間構造と人々の利用行動との関係性を分析し、公園デザインのあり方を示すことを目的とした。

**2.研究方法** 本研究では、「てんしば」の空間構造と、利用行動の調査に基づく分析を行った。空間構造は、文献や論文による天王寺公園の歴史的変遷、公園管理者へのヒアリング調査による設計コンセプトの整理、現地調査による物的環境に関する構成要素の把握により捉えた。利用行動は、滞留行動と移動行動に分け、令和2年10月4日に、調査員7名で8時~19時30分まで調査した。滞留行動では、利用団体を1人、グループ、ファミリー、カップルの4種類、利用目的を休憩、会話、飲食、娯楽、運動、仕事、散歩の7種類に区分し、現地で1時間ごとに滞留場所を地図上にプロットし、利用数を計測した。分析では、時間帯を午前、昼間、午後、夕刻に4区分し、時間帯別に滞留場所の空間構造と利用団体・利用目的との関係性を探った(図1)。移動行動は、「てんしば」に隣接する新世界観光エリアやあべの・天王寺にぎわいエリアとの接続地点における流入出の流動人数をカウントし、調査した。分析では、「てんしば」を拠点とした周辺エリアへの流動を比較した。

**3.解析結果及び考察** 【空間構造】平成24年12月に大阪都市魅力創造戦略のなかで、重点エリアである「天王寺・阿倍野地区」の活性化が提示された。その拠点となる「天王寺公園」のエントランスエリアにおいて、官民連携による魅力向上が求められ、「てんしば」は、周辺エリアの新世界観光エリア、あべの・天王寺にぎわいエリアへの回遊性を促す拠点として設計された。園内は、東西に高木や低木が混在する植栽の空間、中央の芝生広場で構成される。園路には、ベンチや縁石が設けられ、園路を挟んで南北に商業店舗やスポーツ施設などが位置しているように、多様な利用行動を創出し得る物

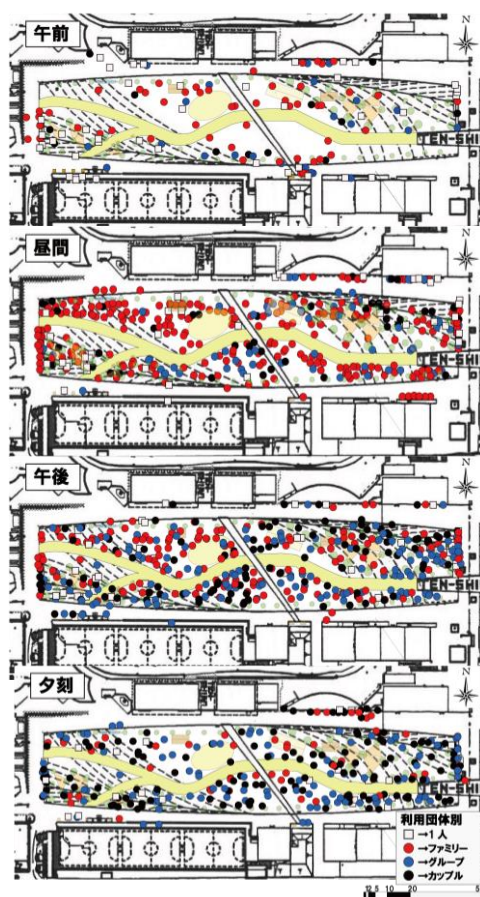


図1 「てんしば」の利用団体別に見た滞留行動の推移

の環境特性を備えている。【人々の利用行動】東西の植栽空間では、午前や昼間にかけて1人やファミリーがそれぞれ4~5割程度、午後から夕刻にかけて、カップルが5割程度滞留する傾向が示された。また、午前から昼間に、休憩（読書や居眠り）が5割程度、午後から夕刻にかけて会話が6割程度であり、静的な利用行動が中心に見られた。さらに、昼間に飲食をするファミリーが高木付近に滞留することが示された。このことから、利用者が木陰のある場所を選択すると考えられる。芝生広場では、午前から昼間にかけてファミリーが6~7割程度滞留し、午後から夕刻にかけて、グループやカップルが3~4割程度滞留していた。また、1日を通して休憩が4割程度、昼間に飲食が5割程度、午後から夕刻にかけて会話が4割程度であり、静的な利用行動である飲食（ピクニック）や会話と、動的な利用行動である娯楽（ボール遊び）や運動が混在している傾向が伺えた。さらに、会話をする人々は、植栽付近に滞留する傾向が示されたことから、平坦な芝生に座りづらいことが推察できる。ベンチや縁石のある園路では、ファミリーが4割程度滞留する傾向が示された。このことから、園路は植栽空間と芝生広場での利用行動が飽和状態になる人々を副次的に受容する空間になることも考えられる。また、1日を通して休憩が6割程度見られることから、園路は気軽に滞在する場所として役割を果たしていることが推察される。新世界観光エリア付近では、流動人数が2,000人程度であり、他の地点よりも少ないことが示されたことから、新世界観光エリア周辺の集客コンテンツを充実化することに加え、「てんしば」を拠点としたアクセス性を確保するという課題も考えられる。「てんしば」全体では、日差しの当たらない、影のある場所や、飲食が行える芝生広場、園路にある縁石に人々が密集する傾向が示されたが、COVID-19の社会情勢に対応する観点から言えば、人々がソーシャルディスタンス（以下：SD）を確保できるファニチャーの配置や仮設物のデザインにも留意する必要がある。

**4.まとめ** 以上を踏まえ、「てんしば」の公園デザインのあり方として、ゾーニングの計画についての方策を考究する（図2）。園内の東西の外側に、静的な利用行動ができる密な植栽空間を設け、その内側に、飲食や休憩など多様な利用行動ができる疎な植栽空間を設けるとともに、円滑な移動の動線が確保可能なペーブメントの整備などが有効策として考えられる。また、静的な利用行動との混在を避けるため、中央に動的な利用行動を受容する芝生広場の適用や、園路にファミリー利用が可能なパラソル付きテーブル、SDの確保が可能なベンチを再編することで、多くの人が滞留できることも考えられる。さらに、産直市場の隣に飲食スペースを設け、ペーブメントや植栽配置による視認性向上や、ヴィスタ景による良好な景観形成を図りながら、新世界観光エリアへ人々を誘導し、集客拡充を促すことも一つの策として考えられる。

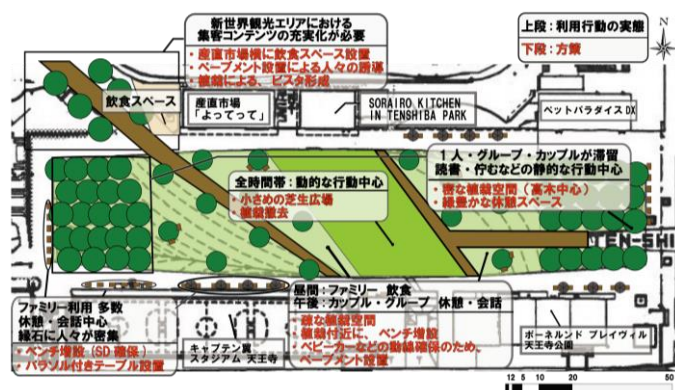


図2 「てんしば」のデザイン方策